

シンポジウム

「コロナ禍を振り返って～各方面から次の有事に備えるために～」

3. 「民間検査センターの立場から ～AVSS と ACT Lab.の取り組み～」

春山 貴弘
(株式会社 AVSS/ACT Lab)

COVID-19 のパンデミックはまさに「100年に1度」と言うべき未曾有の大事件であり、発生から約4年が経過した今でも、その爪痕が、医療機関はもとより、社会面でも経済面でも色濃く残っている。統計がとられていた2023年4月までで、全世界の累計感染者数は7.5億人を超え、累計死者数はおよそ700万人に及んでいる。世界を揺るがしたこの大惨事は沖縄で細々と研究開発活動をおこなっていた我々のような民間企業にも大きな衝撃を与えた。

我々(株)AVSS(エーヴィス)は、2006年長崎大学薬学部の小林信之元教授によって創設された、いわゆる大学発ベンチャーであった。創業者である小林は長年に渡りウイルス感染症の研究に従事しており、その知見・技術をもとに、感染症治療薬の開発を目指して起業された。2011年、縁あって沖縄県の研究開発支援事業に採択され、県内うるま市にAVSS 沖縄研究室を開設することとなった。自社独自の抗ウイルス活性成分の検出技術を基盤に、有効成分のスクリーニング事業、ウイルス検査キットの開発事業などを展開してきた。2018年、長崎研究室の閉鎖に伴い、沖縄に研究開発部門を集約させ新体制で研究開発をスタートさせるべく様々な整備をおこない約1年が経過した頃だった。中国湖北省武漢市で原因不明のウイルス性肺炎患者が多数確認されたという不穏な情報が舞い込んできた。

我々は小さな企業で微力であったが、創業以来一貫してウイルス感染症領域の研究開発をおこなってきており、各種ウイルスの取り扱いや、検出技術についてのノウハウを蓄積していた。未知のウイルスの存在が示唆された当時、我々は即座に未知のウイルス検出法の開発を沖縄で開始した。

2020年2月に沖縄県で県内第1号となる感染者が確認され、県内へのウイルス侵入が明らかになると、3月にかけて猛烈な勢いで検査需要が高まっていった。しかし、当時は検査が沖縄県衛生環境研究所に集

中してしまっており、極めて限られた数の検査しかできず、その対策が急務とされていた。当初沖縄県内にPCR検査を実行できる施設はなく、検体を県外へ輸送し検査を国立感染症研究所に依頼する必要があった。そのため、当時は検査依頼から結果取得までに4～7日を要しており、感染症対策としては致命的なラグがそこに生じていた。我々はそうした状況を憂慮し、県にPCR検査の受入れを申し出た。

2020年4月6日から衛生環境研究所のサポートという形で行政検査に参画した。同時に沖縄県臨床検査技師会と協力し、県内の臨床検査技師に対する新型コロナウイルスの検査講習会を開催した。さらに、コロナ禍の2021年3月には、不安を抱えた一般の方々向けに検査提供すべく、ACT Lab. (AVSS Clinical Test Laboratory) という新会社を沖縄県に登記した。AVSS と ACT Lab. とで連携し、様々な検査需要に応えながら今日までに合計約70万件の検査を実施してきた。2022年には沖縄空手世界大会、世界のウチナーンチュ大会にてICでの新型コロナウイルス検査を無償で引き受けるなどの活動もおこなった。現在AVSSでは県の新型コロナウイルスの変異株解析に協力させて頂いている。

本シンポジウムでは、我々のような民間企業が、コロナ禍の約3年間、どのような問題に直面し何に苦勞してきたか、また、どういった方々にご支援頂いたかなど、その奮闘について共有させて頂きたいと考えている。コロナ禍を前期、中期、終期と分け、各段階で生じた課題と解決策についてご紹介すると共に、今後取り組むべき課題についても言及したい。

2020年3月WHO世界保健機構のテドロス事務局長が全世界に向け「Test! Test! Test!」と呼びかけた。見えない敵と戦うため疑わしい事例は全て検査すべしとの極めて強いメッセージだった。いずれ訪れるであろう次期パンデミックにおいても「検査」の重要性は変わらない。